名
傳
壹

H20
5784
鷗外

曽て文教温故軍防知新の二書にその一隅をとり。其事業ことより屠龍の技に屬す。今や清世此一閑人ならく。洒々落々たる胸中唯風月のみ。天保十二年春日。山崎美成志るす。

名家畧傳目録

巻之一
瀧本坊昭乗　長沼澹齋
佐枝政之進　宮川忍齋
長崎龜女　賣酒郎
義僕元助　那波宗助
○南川文伯　塚原卜傳
風外禅師　○吉益東洞
和泉屋甚助　○板坂卜齋
巻之二
薫蕕堂　偏無為

佐々木玄龍　佐々木文山
皆川湛園　冨士谷成章
遊女佐香保　遊女金太夫
綾部道弘　島の勘十郎
妙喜尼　辰巳屋惣兵衛
服部天游　了月和尚
石田梅巖
巻之三
関思恭　思亮　松山天姥
水島卜也　中沢道二
植松自譲　僧獨立

松雲禅師　志道軒　平賀源内
○原雲菴　○吉田空曇
近松彦重母　浮世又兵衛
菱川吉兵衛　王葛陂
狩野山楽
巻之四
若冲居士　一口残翁
泊如和尚　道旦居士
僧兆溪　石川丈山拾書
林道栄　肥後義士
僧古澗　田中丘隅

大島芙蓉
河保壽
排原香山
壷井雇翁 多田義後
残夢和尚
○古林見宜
通計六十九人

○増田鶴楼
吉田雨岡
心越禅師 東河
奴の小万
夜雨禅師

此篇所載医家九七名今施圏點辨之 二十三年四月三日 森林太郎

名家畧傳巻之一

江戸 山崎美成編
同 千賀春城訂

鷗外藏書

瀧本坊昭乗

瀧本坊昭乗あるひハ惺々翁と号し松花堂ともいへり書画を善くし書法ハ弘法大師の筆妙を渇慕し画図ハ牧溪和尚の風采を仰希せられけりさるから此國のうつしき上手どもまいて書まさりて龍管をとるごとふ人ハ目を驚しよろこばしめたり和歌をも詠じ殊ニ秀

少つねに従て宴を催すあまりにより来賓たえざれ
ども其の價は酒は多寡によりて贏利を貪らず毎歳
春の半にはあるくは櫻花の盛開におくりて日ごとに大樽酒
器を荷擔ひて東山に座を設け嵐山の江畔に行廚き
また秋の末にありて八雲葉は紅に染る比ほひ東福精舎に
席をひらき臨川禅院はあさりに壺ありあきらかに般若湯の
三字を書したる酒旗を建るを遊人の過くはじめは
あやしとさへくは笑ふものもありされども其の酒は精好にめ
でたき好にはあそひ就く飲めりとかやてふ文人才子一步
風流を愛し詩を賦し歌を詠じてあまりに贈るもの多
かれば其の詩歌をあつめて巻となし賓客の觀に備へけるとぞ

賣茶翁姓柴山名元昭字月海西肥前蓮池人也削髮上黄檗山后適利賣茶于洛中春花秋葉無不訪焉后改姓为高名为遊外宝暦十三年癸未七月十六日没年八十九其画像記曰貴者君子之器也富者豪家之器也学行得貴之道也勤倹得富之道也有人徒知富貴可悦而終日營々未得所望文学行勤倹有既修焉未得富貴猶有名利従身有誠信令然也今於賣茶翁有感余又命四民志業薩翁之需而図此図為画中無一点俗気高尚之気動於命上呈筆墨之妙亦骨相合然也余

美成云この賣酒郎の傳は芥川彦章の記しつ
たてるありその記事は末に論じたるはこれよ
り先きに賣茶翁といふ希世の名人あり賣酒郎
はその人を慕ひけるにや柳翁をこのみ名を詢の
人氣たさ輕佻恥なき輩なるといふべけれど姑く
其雅尚を愛して傳をつたへこれに贈るとの事を
いふ
又云般若湯は酒の異名なり東坡志林にみえたる
かと僧家の隠語に出たりまさ抑牌に志る下
物は其故事に據りて掛ずる世説言語に載
仲君春日雙柑斗酒を携へ往ふに人何く行や

蒹葭堂所藏賣茶翁像

少年時聞長老談翁好茶老今四十年翁一匹夫非有子孫門生傳其救而世人好之至図其像誠信故也寛政九年秋日同江州日野外池義府記

と同しく茗を煮て黄鸝の声を聴くこそ雅俗耳の針砭詩腸の鼓吹なりといへり同豪爽にて蘊子美豪放不羈にして酒を好めり外舅杜祁公が家に在りて毎夕讀書するに酒一斗を限りとす八漢書を披ひて密子これを覗ひけるに子美漢書張良傳をよみけるが良与客狙撃秦皇帝といふ條にいたりて掌を撫て惜いかな撃ちあたらずとて遂に一大白を満引す又よみけるに良曰始臣起下邳与上會於留此天以授陛下といふに至りて又案を按て君臣の相遇こと難きことかくの如しとて復一大白を挙ぐ公笑ていはく

ことありとやかゝるやうのこと多くの益をたすけし今ハ
その製をつくりて治水の具としてく便利なること多しとぞ
ある年所々にてところの川普請をせしときのありしに洞
山の麓まで深山なれバ竹ハなし谷あひに在るところの藤か
づらを多く伐りとらせて蛇籠に造りてそのをりしもふぢ
色の木綿十反急用のよし國衛へ申つかはしけれバ諸司の
者ども川普請ハ急用なれバいかなる事にもありなんと
水利の事ハすぐれて身の宗助に申付せられたることなれバいひ
出たるまゝに調へきしかるに其の後宗助急なる村民の
子どもを集めて河原にて日々相撲をとらせ勝たるを
その中にて力量あるものを賞して身の藤色木綿を一

幅づゝ褒美にとらせけれバいよ／＼よろこびて力を
自讃するものあれバやがて其の児童に課せて日々河原
の小石を運ばせて蛇籠に詰させたるほどにおのづからあらそ
ひ我劣らじと自勵みたることなれバ日あらずして幾ば
くの雑費もなく数十里の蛇籠成就せしとぞ其の後
宗助かのとめたる所にある河原にて龍の形勢あるを見つけて其の
石を掘らせてかの件の石を龍卵と祀りしとぞ其の神祠
ハ城下より小港といふ湊へ通ふ路なる抜参山の頂に在て
土俗ハ龍卵堂といふとぞ

南川文伯

南川文伯ハ伊勢國薦野の生れにて京師に遊学し医術

徒の源とハなさざれバまさに心越禅師の法嗣といふを覚
つかふし風外禅師の布袋の画ハ蓋子が璧に等しき泉和
尚の賛辞のあるものハ正徒よりふるき人なるをと
辨を待ずしてしるべし去るとて此の老人をまつ
のて

吉益東洞

吉益東洞名ハ為則字ハ公言安藝の人なりそのもとハ管
領畠山政長の裔なり東洞年ころ〳〵志気ありその
祖先の天下に名族たるをおもひ再び家を興さんとおもひ
兵法を学び馬を馳せ剣を試ミ又祖の医業を継ぐ年
已に長じて自おもへらく太平の世武藝を熟すとも

その術を施すの日なし一日に慨然として天を仰ぎ歎じ
て云大丈夫まさに良相となるべからずんバ必良医となるべし
とて遂に医を学ばんとおもひ祖父畠山が菴名ハ政の門
人津秋順といふ者あり金瘡産科に術を伝ふ是によ
りて東洞云懐孕ハ婦人の常なり金瘡ハ外傷なり病にあ
らざれバ薬せずして可なり病あれバ證に従ひて療治す
べし何ぞ科を分つことをせんとて医者にならんと志し年ご
ろ勉めて古医方に遂に陰陽五行の腐説を癈し専ら
の張仲景を宗として常にいへらく万病唯一毒衆薬皆
毒物なり毒をもって毒を攻む毒去れバ体ハ自健なりとて
めよりて元気を補益するといふことあらんやされバ補といふこと

墳墓ハ浅草西福寺にありと云へし

美成云太申のことより文学にこゝろざバ文雅の虚名を求むといへどもさて八芳を千載に伝へんとの難きを知りてせめて八臭を万世に遺さんと此微意にや太申の名を弘めたき餘りに太申縮といふを織り出しかねて通ひける吉原の傾女巴屋の豊里といへるに着せ縮緬といふなれにその縮を着てまゝその姿を見せけさへ戯場にても中村伝九郎が衣裳にもあつらへてハ太申縮もあまねく世に弘まりしかんとおもひて呉服屋の見世に行て太申縮やあると尋ぬるに

その家なる手代太申縮といふ名をしらべいかなる形ぞといへるに太申ハ太申太申かくの如き紋なるよしいふにそれハ世に伝九郎縮と云ものとぞ答へけるとかやまた浅草寺境内に楊樹あまた植て太申楊と名づけ井通興の文を請ひ碑を建てありしところ太申楊と云諢をもたせ戯場狂言にせりしを又太申なる無介といふ人足にあとしもて「お江戸太申さまハ楊かお好と云唄をうたはせしこともありといへりこの類ひ此事跡など多かりしかバ為に終に八家産を破れりとぞなきまして話柄に附すのみ

桜坂卜斎

杉野意仙ハ医ヲ業トス豊後ノ人ナリ一休禅師ト善ク大徳寺ニ居ル禅師常ニ
佳肴ヲ得ル温和ニテ之ヲ食フ意仙聞テ曰ク何为レゾ然ルヤ曰ク邪正ハ一如ナリ飲食亦美
悪ナシ意仙肯セズ曰ク真偽分ケ心何ゾ温和スルコトヲ为ン是ヨリシテ後禅師モ亦食ヲ温和
セズト云フ

東京大學圖書
B 23475
0004674032

名家略傳 巻之四

江戸 山崎美成 編
同 千賀春城 訂

若冲居士

若冲居士名ハ鈞字ハ景和平安の人なりもと伊藤と称す後藤氏を改む父名ハ源母ハ武藤氏其女享保元年二月八日京師錦小路に生る若冲の人となり断として他の技芸なし唯絵事のみを好めりはじめ狩野氏の流を学べど漸く其画法に通じ自知りてさく是法ハ狩野氏の法

大雅堂家譜作高
孟典谷派

むかしく不虞の備をなし農府をうちたて数月乃間虚偽を容るところなく玄冗抛すてあるにあらし丘隅没するに姓名もさへ朝野ともにこれを嘆かざるものなしそのうちに著はすところの書臣呂省要二十巻あり世に行はるといふ

大島芙蓉

大島芙蓉名ハ孟彪字ハ孺皮芙蓉ハその号なり甲斐の国の人なりその先ハ新田の氏族なり故ありて志ばらく姓名を易へしとぞ芙蓉の号の始より更るとなれバ河内あるハ山城のあし人とあり敏亮にして才ありよって坊城前公子に従ひて典故を習ひて朝儀の学に携る尤

精し性書画を愛すおよそ石室金匱の秘あるひハ名蹟碑記の類あまねく捜りもとめ博多强記その法をならびにの古に風流の人士慕ひ帰するものこと多くその博識を資て鑒定にかかるものかずかざれバ名價河内にあまねく至る篆刻の妙絶に至りハ国より論を待ざれバ世人きそひ乞ひて珍とせり父を光初といふ京ろく徒本氏に従ひて医を業とす芙蓉医を好まず弱冠にして京師に遊び遂に名を成すにいたれり天明四年四月二十四日没す時年六十三歳小石川無量院に葬る

美成云芙蓉にかつて銀印補正の撰あり実に篆刻を学ぶもの至宝にして今猶栄ある一助なきにあらず

増田鶴楼

増田鶴楼その先人よく眼疾を療するの神効方を異
人より受け天正の末年江戸に来りて市に隠れて一家を鬻
ぐ年をつくしその肆人に知られ後に至て世ゝその業をまも
り積聚の貲あらざれども甚だ得るところの薬価をもて已に
都豪の間に藉ていきほひも多きをとれりしかるに鶴楼に及
びてもつぱら学を好めり名ハ助字ハ伯濤少壮にして白石先生
に師事て詩賦をもて高弟と称せらる白石先生の詩名海
内に響わたること数十年といへどもその人を知り固より経世
済民の志しあるにて詩名をもて家を成すことを恥とし自視
高尚にして妄りに人に仮ずかくして詩賦をもて人に教ることに

ことを欲せざれバ故にその門に登るものも至て寡し鶴楼独詩
をもつて白石先生に寄愛せられたりし白石先生歿して
その家に往くことありしが貯薬楼に鶴を画けるを見て
鶴楼と題せしむ遂にまた自号とせり鶴楼常に賓客
を好みて酒肉席に絶ることなく昼夜来るもの相ひつきて
の先に至るものあるひハ他に行んことを請ども去ることを
得せしめず後なる者と雑然として日夕毎に客常に満
ち主人その中に起坐し自然として歓び夜に至れども倦こ
となしたまたま熟酔すれバその席に在りて仮寐す少
ありて寤れバ復人を呼て酒を命ず迎へて送らず必
しも賓主の容を為ず相ひ忘るゝをもて

きもれく行るゝぬ是よりこれ雪女を世人よびて奴と異名せ
里奴とハ其の小て俠者の称なり されバ其の噂浪華ハさらなり在々までも呼
えしがバさらやく延享五年正月二日より豊竹座の操芝居
まて客競出入湊と云狂言に奴小万と云俠女子を作組し
実ハ雪女を摸しられりかくれバ雪女が噂ますく高く後
ハ雪女が名をバいはずて奴の小万と唱へけるや雪女もこれ
を自らよきことおもひて俠気日々に募りしが文事にも志
ありて梁田蛻巌の門に入り又和哥俳諧にもうとからず いつ
しか狩里恭と契りて遂に妻となりぬ雪女つねに語りしハ我
が家ハ三好修理大夫長慶が裔なりとて遁世の後ハ三好
正慶と自称し難波村に住みて歿年詳ならず月光院に納め

蒹葭堂雑録ニ其ノ尺牘ヲ載ス又否リ文化三年死年七十八ト未知孰是

て身を雲水の如くに任せ世を捨つるとも猶俠気やありけん或る日
瑞龍禅寺に大法会ありし時急雨ふりて参詣の群集雨具
此所なくて只雑踏の折から西堂尼君に忍びとて長
町へ人を馳せ傘百本を買もとめ半面の識だになき老若へ
借しあたへぬとぞ文化元年の春七十六歳にて身まかりぬ

残夢和尚

残夢和尚ハ号を宝山と称し誰が嗣承とふ事を詳にせ
ず永禄年間関東に遊化し常陸北条泉寺に住職より
慈眼大師にまみえし時残夢にあひて修禅の要旨を学
ひて後常に謂て云ふ多く残夢和尚に参禅して上
里長生不老乃術を得たり宇都宮なる興禅寺の物外

是ハ世塵にはなれ山林にはなれずこれを二乗
と謂て可ならんや況や親七傳の妻と窮め誠むる
を風顛と謂て可ならんや誰か師北ん術を窺ひ
知るものなくんやこれ知るとなきこそ師乃素
志なるべけれされど果して風顛二乗のたぐひにや柳
有為の人にやとぞいへり
又云唐の白居易が廬山夜雨草庵中といふ句
あり禅師も白氏と同癖にて夜雨を愛せらるゝ
が向ひハ元の僧熙晦機の詩に人間万事塞翁
馬推枕軒中聴雨眠とある句を本とかや
閑じんずるにて夜雨にんを澄し寂静にてんと

かやうならハさもあれ世の常ならぬ人にこそ

古林見宜

古林見宜はじめの名ハ正栄播州飾磨
郡の人なりその先二品中書令具平親王より出たり祖父
赤松加賀守祐村より矢人盃人は心を易るを思惟
し武をすてゝ医術を以て人を活さんことを思ひて浦
を渡り明に入り其東の名を学び治法継ぎて帝中するを
多くりその績を解きて帰るに及びて西皇帝賜るに蜀
錦をもてせりされ五綵心を幸き同を輝し禁方を織
呈献せり世に傳ふる孫袋子その方なり業備の好医也
さらにまた行ひたる晩年耕菴と号す父を塋菴本素と

一からせき
一咽喉ぜりつき
一痰飲にて気ふさがり
一婦人産前産後妊娠の咳
一痰飲吐ことを出兼
一痰飲にてむねの痛
一小児百日ぜき
一此方痰より起る病一切によし

抑痰咳の薬昔より諸の書物にのせ、あまたの薬ありといへども此方の痰咳にても一夜に留る薬ハ吾が家の名法にして他に類なし。猶々用ひて後に功を知るべし。尤外に諸家名法の薬多く有。御包紙等に吟味ここに御求可有候

東叡山
御用
御書物所　江戸下谷御成道
青雲堂英文蔵製
[青雲堂之印]

森澟太郎

東京大學圖書
0004674032
東京大学総合図書館